

英語ライティングにおけるフィードバック研究の概観：今後の導入の可能性

著者	仲川 浩世
雑誌名	研究論集
巻	108
ページ	257-267
発行年	2018-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00007831/

英語ライティングにおけるフィードバック研究の概観

— 今後の導入の可能性* —

仲 川 浩 世

要 旨

本研究の目的は、英語ライティング・フィードバック研究の概観を振り返り、今後の日本の英語教育への導入を示唆することである。フィードバックとは、言語学習の発達を促進するため、発話に対する口頭訂正フィードバックと、L2（第二言語）ライティング・フィードバックに分けられる。本稿は、英語ライティング・フィードバックに焦点を当てる。L2ライティングにおける訂正フィードバックは、内容や構成に関するものと文法に対するものがある。さらに、初期のL2ライティング研究とその後の第二言語習得（SLA）研究は観点が異なる。すなわち、L2ライティング研究のフィードバックは、形式面と内容に重点を置いていた。これに対して、SLA研究では、習得を目指すため、文法項目の訂正フィードバックに関するものが大半を占め、長期的に定着しないという批判もある。今後は、情意要因を考慮し、質的な調査に取り組むことが望ましいと考えられる。

キーワード：フィードバック、英語ライティング、第二言語習得、文法

1. はじめに

本稿の目的は、英語ライティングにおけるフィードバック研究の理論を考察するとともに、日本の英語教育現場への導入の可能性を示唆することである。そして、今後のライティング指導において、効果的なフィードバックを明らかにすることである。

フィードバックとは言語学習や能力の発達において、最も影響を与える要因であり、提供する種類によって、その効果が異なる（Hattie & Timperley, 2007）。そして、それは、学習者の発話に対して口頭で正しい表現に言い換えるものと、ライティングにおけるフィードバックの2種類に区分できる¹⁾。

しかしながら、フィードバック理論の概要を日本語で紹介したものは、未だ多く存在せず、大関・名部井・森・田中・原田（2015）や鈴木（2017）の研究が挙げられるだけである。その中でも、田中（2015）はライティングにおけるフィードバック（Feedback）や訂正フィードバック（Corrective Feedback 以下CF）²⁾ 研究の概観を論じている。

この背景を踏まえて、本研究では Storch (2010)、田中 (2015)、そして Bitchener and Storch (2016) を参考に、これまでのライティング・フィードバック研究を振り返る。そして、今後教育現場で必要なフィードバックの在り方を示唆することを目的とする。

2. 訂正フィードバック

2.1 訂正フィードバック (Corrective Feedback) の種類

訂正フィードバック (Corrective Feedback 以下 CF) は、「学習者の口頭の誤りに反応し、第二言語 (以下 L2) 能力を促進させるための働きかけ」と定義づける (Lyster, Saito, & Sato, 2013)。すなわち、教員は CF を学習者の発話の間違いを訂正するために用いる。そして、それによって、L2 学習を促進することを目指している。

これらの口頭における CF を「いつ、なにを、どうすればいいか」(新谷, 2015) という問いかけを念頭に入れて、教員自らがフィードバックを与えなければならない。「いつ」というのは、「直後訂正」あるいは「遅延訂正」のいずれかを選ぶのかという意味を表す。そして、「なにを」というのは、「どんな言語項目を対象とするのか」ということである。さらに、「どうすればいいか」というのは、CF の提供の方法もしくは CF の種類とみなされる (表 1 参照)。以下に CF の種類を示す。

表 1. CF の種類

名称	説明	例
リキャスト (Recast)	学習者の発話の意図を変えずに教員が誤りを訂正し、言い直す	Yesterday I went to school.
明示的な訂正 (Explicit correction)	学習者に誤りがあることを知らせ、正しい表現を提示する	Not go. Went.
明確化の要求 (Clarification request)	学習者の発話が理解できないことを伝えるため、言い直しをさせる	I'm sorry?
繰り返し (Repetition)	学習者の話した誤りを含んだ文をそのまま教員が繰り返す	Yesterday I go to school?
誘導 (Elicitation)	学習者に正しい発話をさせるために教員が質問や不完全な文を言う	Yesterday...
メタ言語の手がかり (Metalinguistic feedback)	学習者の誤りを示唆するメタ言語的な知識を教員が与える	You need to use the past tense.

(神谷 (2017) より筆者作成)

2.2 ライティング訂正フィードバック (Written Corrective Feedback) の定義

2.1 では、学習者の発話における口頭の CF を提示した。次にライティング・フィードバック

ク (Written Corrective Feedback 以下 WCF) 研究について述べる。第二言語 (以下 L2) 学習の分野では、ライティング・フィードバック研究は1980年代から続いている (Sheppard, 1992; Oi, Kamiura, Kumamoto, & Matsumoto, 2000; Ferris & Roberts, 2001; Ferris, 2003; Ellis, Sheen, Murakami, & Takashima, 2008; Storch, 2010; Shintani & Ellis, 2015; Bitchener & Storch, 2016)。

ライティング・フィードバックとは、学習者の「書いた作品」に対して、教員が評価を与え、フィードバックという手段を用いて、ライティング能力を発達させることを指す。すなわち、フィードバックには

1. 内容や構成に対するコメント
2. 言語面 (文法) における訂正フィードバック

がある。言い換えれば、L2ライティング指導に注目が集まるようになって、フィードバック研究が行われるようになった。次にL2ライティング指導の動向について触れる。

3. 第二言語 (L2) ライティング指導

L2ライティング指導は、およそ3つの段階に区分される。すなわち、1960年の時代は、「形式重視のアプローチ」であった。具体的には、制限英作文 (controlled composition または guided composition) が主に指導されていた (Raimes, 1983)。制限英作文とは、決まった構造を当てはめていく「パターンの繰り返し練習」のことである。

2つ目は、1970年代後半からの「書き手重視の教育法」の「プロセス・アプローチ」である (田中, 2015)。プロセス・ライティングが盛んになり始めて、教員や学習者同志でフィードバックを提供し、推敲をするという過程が重視されるようになった。

そして、3つ目は、1980年代後半からみられるようになった、内容中心のアプローチ (content-based approach) である。書き手には、読み手を意識した、各ジャンルの特徴を含んだライティングが求められるようになった。

現在も教育現場ではプロセス・ライティングが中心であり、内容面や文法面のフィードバックを与えて推敲させるという研究が続いている。このように、L2ライティング指導と共にフィードバック研究が注目されるようになった。

フィードバックや WCF 研究のみを検討してみると、L2ライティング研究と第二言語習得 (Second Language Acquisition 以下 SLA) 研究という2つの側面から分析しなければならない³⁾ (田中, 2015; 鈴木, 2017)。SLA におけるフィードバック研究が着目され始めたのは、L2ライティング教育が発達した後である。そこで、本稿では両者の WCF を比較して考察する。

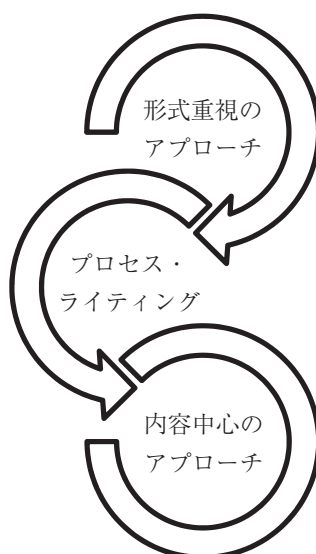


図1. L2ライティング教育の流れ
(大井, 2017より筆者作成)

4. ライティング訂正フィードバックの背景

4では、ライティング訂正フィードバック（WCF）研究の動向について考察する。

4.1 第1期（1980年代から2003年まで）

Storch（2010）はWCFの歴史的背景について、1980年から3つの時代に区分している。第1期は、1980年半ばから2003年であり、「L2ライティング研究におけるWCF」と述べている。

表2. 直接的（Direct）WCFと間接的（Indirect）WCFの比較

研究	被験者	WCFのタイプ	期間	効果
Lalande (1982)	60人のアメリカの大学の中級 ドイツ語学習者	(1) 直接的 (2) ガイド化学習と問題解決 法	10週間	(1)の方が(2) より効果有
Semke (1984)	141人のアメリカの大学の ドイツ語学習者	(1) コメント (2) 直接的 (3) 直接的とコメント (4) 間接的コード化	10週間	差無
Chandler (2003)	31人のアメリカの大学の ESL 学習者	(1) 直接的と間接的な下線 (2) 誤りに対する説明と間接 的な下線	1 セメスター	(1)の方が(2) より効果有

この時期、ライティング教育では、文法的な正確さ（grammatical accuracy）に注目が集まっていた。そして、これらは、直接的（Direct）あるいは間接的（Indirect）な WCF に分類された。Direct WCF とは、教員が誤りを直接訂正することを示す（Ferris, 2003）。Indirect WCF とは、書き手のライティングの誤りに下線を引いたり、記号を用いたりして、ヒントを与えることとみなされる。すなわち、学習者自身に誤りを認識させようとする試みである（Lalande, 1982; Semke, 1984; Chandler, 2003）。

4.2 第2期（2005年以降から近年まで）

第2期は、2005年以降から近年までのことを指している（Bitchener & Knoch, 2008; Sheen, Wright, & Moldawa, 2009）。Storch（2010）によれば、この時代、文法の正確さを改善させるために、様々な WCF の実験が行われていた。しかしながら、ほとんどの実験は一貫性がなく、問題点が残されたままであった。さらに、この時期は、Direct WCF が大多数を占めていたため、その種類は多様であった。また、正確性の改善には、Direct CF の方が Indirect CF よりも効果的であるとも考えられていた（Ferris & Roberts, 2001; Bitchener, 2012; Shintani, Ellis, & Suzuki, 2014）。とりわけ、日本人初級学習者においては、直接的な WCF を好む傾向があると伝えられている（白畑, 2015）。しかしながら、どの文法項目が効果的であり、WCF の方法については、まだ調査は十分行われてはいない。

4.3 第3期（今後の流れ）

第3期とは、これからの展望のことを述べている。現在までの実験研究は、ライティングの正確性に焦点を当てた文法に関する WCF が主流であった。今後は、学習者のライティングと情意要因や社会的背景などの質的な事例研究を通して、調査を重ねる必要がある。学習者の中には、フィードバックが有効な学生とそうではない者が存在する。例えば、アジア人留学生と様々な文化的背景を持つ、ニュージーランドの移民という2つのグループに、同じ冠詞の WCF を提供した。その結果、アジア人留学生の方が、WCF を好む傾向にあるということがわかった（Bitchener & Storch, 2016）。したがって、WCF と学習者の動機づけとの関連性を探ることが求められよう（Storch & Wigglesworth, 2010; 小金丸, 2015）。

表3. ライティング訂正フィードバック研究の動向

区分	特徴
1980～2003	L2ライティング研究における WCF
2005～近年	文法の正確性を改善するための WCF
今後	動機づけとの関連性を探るための WCF

（Storch, 2010より筆者作成）

次に、Direct WCF と Indirect WCF の先行研究において、有名な Ferris と Truscott の論争について論じる。

5. Ferris と Truscott の論争

4. では WCF 研究について、年代順に提示した。次に、文法の誤り訂正に関する Ferris と Truscott の論争について触れておく。Truscott (1996, 2007) は文法の誤り訂正は教員にとって労力の浪費であり、学習者のライティングの上達において効果的ではないと主張した。これを受けて、Ferris (1999, 2003) や Chandler (2003) といった L2ライティング研究者達は異議を唱え、大論争へと発展した。この論争をきっかけに、フィードバック研究の関心はライティングへとシフトしたとも考えられよう。

これまでは、学習者の発話に対する口頭での言い直し (recast) に注目が集まっていた (Lyster, Saito, & Sato, 2013)。そして、SLA 研究者の多く (Truscott 自身も) が、明示的知識 (explicit knowledge) もしくは暗示的知識 (implicit knowledge) を提供することで、言語習得を助長すると主張していた。言い換えれば、SLA におけるフィードバック研究は、「言語習得」のためのものである。したがって、フィードバック研究の概観を振り返るためには、L2ライティングの分野と SLA の両方の観点から論考をまとめなければならない。そこで、以下に WCF 研究を比較して、提示する。

6. L2ライティング研究と SLA における WCF の比較

ライティング訂正フィードバックに関する研究を L2ライティング研究と最近の SLA 研究の観点から比較し、表 4、5 に示す (田中, 2015; Bitchener & Storch, 2016; 新谷, 2015; 鈴木, 2017)。主な相違点として、L2ライティング研究においては、フィードバックがライティングの改善に有効かどうかということに焦点が当てられている。そのため、内容面と言語形式の両方がフィードバックの対象とされている。

これに対して、SLA 研究においては、不定冠詞や冠詞といった文法項目をデータ分析の対象としている。また、Direct WCF と Indirect WCF 以外にも、近年では、メタ言語知識の提供によるフィードバックの効果が報告されている (Bitchener & Storch, 2016)。これは、WCF だけではなく、目標項目の説明を口頭やライティングによって与えるのである (Shintani & Ellis, 2013)。

SLA 研究におけるフィードバックの効果として、直後のテストでは有効であるが、遅延テストではあまり有効性は伝えられてはいない。したがって、ライティング能力の改善のために

は、特定の文法項目のみに焦点を当てた WCF は、学習者にとって有益とは言い難い。さらに、「習得」を重要視しているため教育効果というニーズを満たしていないという主張もある (Lee, 2008)。

表 4. L2ライティング研究における WCF の効果

研究	被験者	WCF のタイプ	誤りのタイプ	効果
Ashwell (2000)	50人の日本の大学の EFL 学習者	(1) 内容の後形式 (2) 形式の後内容 (3) 形式と内容 (4) 統制群 (下線または○をつける)	文法 語彙 ライティングの規則	有
Fathman and Whalley (1990)	72人のアメリカの大学の ESL 学習者	(1) 下線 (2) 統制群	包括的な誤り	有
Ferris and Roberts (2001)	72人のアメリカの大学の ESL 学習者	(1) コード化 (2) 下線 (3) 統制群	動詞, 名詞, 冠詞 語彙の誤り, 文構造	有

表 5. SLA 研究における WCF の効果

研究	被験者	WCF のタイプ	誤りのタイプ	効果
Bitchener (2008)	75人の初中級 ESL 学習者	(1) 直接的 (2) 直接的 ライティングのメタ言語知識 (3) 直接的と ライティングと口頭のメタ言語知識	不定冠詞 既出の定冠詞	(1)と(3)が 効果有
Bitchener and Knoch (2008)	144人の初中級 ESL 学習者	(1) 直接的 (2) 直接的 ライティングのメタ言語知識 (3) 直接的 ライティングと口頭のメタ言語知識	不定冠詞 既出の 定冠詞	無
Shintani and Ellis (2013)	49人の初中級 ESL 学習者	(1) 直接的 (2) メタ言語知識 (3) 統制群	不定冠詞	(2)が(1)より伸びたが 遅延は差無

(Bitchener & Storch, 2016より筆者作成)

7. 焦点化と非焦点化

初期は、幅広い文法項目に対して WCF が提供されていた (表 4 参照)。しかしながら、最近の研究から、初級学習者にとって、特定の文法項目に対する WCF の方が効果的だと主張さ

れている。実際のところ、焦点化された WCF の方が多く実施されている。そこで、「誤りは焦点化 (focused) あるいは非焦点化 (unfocused) した方がよいか」という点を検討するために、以下に先行研究を提示する (Bitcher, Young, & Cameron, 2005; Truscott & Hsu, 2008; Van Beuningen, De Jonge, & Kuiken, 2012; Shintani & Ellis, 2013)。

表 6. 焦点化されたライティング訂正フィードバック

研究	被験者	誤りのタイプ
Bitchener <i>et al.</i> , (2005)	中上級 ESL 学習者	定冠詞, 過去時制 前置詞
Shintani & Ellis (2013)	初中級 ESL 学習者	不定冠詞

表 7. 非焦点化された WCF

研究	被験者	誤りのタイプ
Truscott & Hsu (2008)	47人の上中級 ESL 学習者	文法全般, スペル, 句読点
Van Beuningen <i>et al.</i> , (2012)	268人の高校生のオランダ語 FL 学習者	文法全般, 構造不 完全な文, 語彙句 読点, スペルなど

(Bitchener & Storch, 2016より筆者作成)

これまで、SLA においてフィードバック研究は、文法に焦点を絞った実験が繰り返されてきた。近年では、SLA の分野においても、内容と文法の両方にフィードバックを与えるという試みが報告されている (タスク中心の教授法など)。また、フィードバック後に書き直しをさせることで、ライティング能力の発達に効果的であるとも伝えられている (鈴木, 2015)。すなわち、プロセス・ライティングと書き直し練習を繰り返し、学習者は教員のフィードバック後に、正しい形式と自分の書いたものを比較することで誤りに気づくのである。そして、自分のライティングにおける問題点 (弱点) を省みる機会を得るかもしれない。したがって、今後のフィードバック研究は、L2ライティングと SLA の両者が協力して実験を行い、「いつ、なにを、どうすればいいか」という点に考慮して、取り組んでいかなければならないであろう。

8. まとめ

本稿では、ライティングにおけるフィードバック研究の概観について、1980年代以降から現在までを考察した。L2ライティングも SLA の分野も WCF は、文法を重視する傾向にある。しかしながら、直後のテストでは、効果がみられるが、長期的な定着を考慮してみると、文法に対する WCF が必ずしも有効であるとは実証されていない。

したがって、今後のフィードバックは、情意要因の把握や動機づけ問題の改善に関連したものが求められる。例を挙げると、小金丸（2015）は、初等・中等教育レベルの学習者を指導し、ワークシート返却時に学習者の努力を評価するコメントを提供している。このことは、特に習熟度の低い学習者や動機づけの低い者にとって、励みとなると考えられる。また、教員は「フィードバックのフィードバック」を求めて、学習者の指摘した授業の改善点に回答し、お互いにコミュニケーションを取って信頼関係を築くことを目的とする。このように、単なる「添削」という作業ではない「学習者との授業作りのためのフィードバック」の導入が望ましいと言えよう。

それゆえ、事前の対象学習者のニーズや授業内外の学習支援が重要となってくる。現在までのところ、日本人学習者のための有効なフィードバック研究はまだ確立されていない。今後の課題として、日本の英語教育現場に見合った SLA 理論に基づくフィードバック支援法を考案し、ライティング能力発達のための指導法を探っていきたい。

* 本研究は、JSPS 科研費 18K00900の助成を受けたものです。

注

- 1) フィードバック研究には、学習者の発話に対するものとライティングにおける訂正フィードバックやコメントがある。
- 2) 本稿における訂正フィードバック (Corrective Feedback) は修正フィードバック (白畑, 2015) とも呼ばれている。
- 3) WCF の研究は、L2ライティング研究と SLA 研究の観点から検討する必要がある。本稿では、田中 (2015) を参考に、相違点を整理して提示した。

参考文献

- Ashwell, T. (2000). Patterns of teacher response to student writing in a multiple-draft composition classroom: Is content feedback followed by form feedback the best method? *Journal of Second Language Writing*, 9, 227-257.
- Bitchener, J. (2008). Evidence in support of written corrective feedback. *Journal of Second Language Writing*, 17, 102-118.
- (2012). A reflection on 'the language learning potential' of written CF. *Journal of Second Language Writing*, 21, 348-363.
- Bitchener, J., & Knoch, U. (2008). The value of written corrective feedback for migrant and international

- students. *Language Teaching Research*, 12, 409-431.
- Bitchener, J., & Storch, N. (2016). *Written corrective feedback for L2 development*. Bristol: Multilingual Matters.
- Bitchener, J., Young, S., & Cameron, D. (2005). The effect of different types of corrective feedback on ESL student writing. *Journal of Second Language Writing*, 14, 191-205.
- Chandler, J. (2003). The efficacy of various kinds of error correction for improvement in the accuracy and fluency of L2 student writing. *Journal of Second Language Writing*, 12, 267-296.
- Ellis, R., Sheen, Y., Murakami, M., & Takashima, H. (2008). The effects of focused and unfocused written corrective feedback in an English as a foreign language context. *System*, 36, 353-371.
- Fathman, A.K., & Whalley, E. (1990). Teacher response to student writing: Focus on form versus content. In B. Kroll (Ed.), *Second language writing: Research insights for the classroom* (pp.178-190). Cambridge University Press.
- Ferris, D. (1999). The case for grammar correction in L2 writing classes: A response to Truscott (1996). *Journal of Second Language Writing*, 8, 1-11.
- (2003). *Response to student writing: Implications for second language students*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Ferris, D., & Roberts, B. (2001). Error feedback in L2 writing classes: How explicit does it need to be? *Journal of Second Language Writing*, 10, 161-184.
- Hattie, J., & Timperley, H. (2007). The power of feedback. *Review of Educational Research*, 77, 81-112.
- Lalande, J.F. (1982). Reducing composition errors: An experiment. *The Modern Language Journal*, 66, 140-149.
- Lee, I. (2008). Student reactions to teacher feedback in two Hong Kong secondary classrooms. *Journal of Second Language Writing*, 17, 144-164.
- Lyster, R., Saito, K., & Sato, M. (2013). Oral corrective feedback in second language classrooms. *Language Teaching*, 46, 1-40.
- Oi, K., Kamimura, T., Kumamoto, T., & Matsumoto, K. (2000). A search for the feedback that works for Japanese EFL students: Content-based or grammar-based. *JACET Bulletin*, 32, 91-108.
- Raimes, A. (1983). *Techniques in teaching writing*. Oxford University Press.
- Semke, H. D. (1984). The effect of the red pen. *Foreign Language Annals*, 17, 195-202.
- Sheen, Y., Wright, D., & Moldawa, A. (2009). Differential effects of focused and unfocused written correction on the accurate use of grammatical forms by adult ESL learners. *System*, 37, 556-569.
- Sheppard, K. (1992). Two feedback types; Do they make a difference? *RELC Journal*, 23, 103-110.
- Shintani, N., & Ellis, R. (2013). The comparative effect of direct written corrective feedback and metalinguistic explanation on learners' explicit and implicit knowledge of the English indefinite article. *Journal of Second Language Writing*, 22, 286-306.
- (2015). Does language analytical ability mediate the effect of written feedback on grammatical

- accuracy in second language writing? *System*, 49, 110-119.
- Shintani, N., Ellis, R., & Suzuki, W. (2014). Effects of written feedback and revision on learners' accuracy in using two English grammatical structures. *Language Learning*, 64, 103-131.
- Storch, N. (2010). Critical feedback on written corrective feedback research. *International Journal of English Studies*, 10, 29-46.
- Storch, N., & Wigglesworth, G. (2010). Learners' processing, uptake and retention of corrective feedback on writing: Case studies. *Studies in Second Language Writing Acquisition*, 32, 303-334.
- Truscott, J. (1996). The case against grammar correction in L2 writing classes. *Language Learning*, 46, 327-369.
- (2007). The effect of error correction on learners' ability to write accurately. *Journal of Second Language Writing*, 16, 255-272.
- Truscott, J., & Hsu, A.Y.P. (2008). Error correction, revision, and learning. *Journal of Second Language Writing*, 17, 292-305.
- Van Beuningen, C.G., De Jong, N.H., & Kuiken, F. (2012). Evidence on the effectiveness of comprehensive error correction in second language writing. *Language Learning*, 62, 1-41.
- 大井恭子「認知心理学の成果を援用したライティング指導—「キュー・カード」を使用した中学生への指導の効果検証」『言語教育研究』第9号、2017年、87-109頁。
- 大関浩美編著・名部井敏代・森博英・田中真理・原田三千代著『フィードバック研究への招待—第二言語習得とフィードバック』くろしお出版、2015年。
- 神谷信廣「話す活動と文法指導—フィードバック」鈴木渉編『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店、2017年、45-62頁。
- 小金丸倫隆「中長期的な視点で行うフィードバック」『英語教育』第64号、2015年、26-27頁。
- 白畑知彦『英語指導における効果的な誤り訂正—第二言語習得研究の見地から』大修館書店、2015年。
- 新谷奈津子「フィードバックに関するFAQ「いつ、なにを、どうすればいいか」」『英語教育』第64号、2015年、10-13頁。
- 鈴木渉「ライティング・フィードバックの効果を最大限高めるには」『英語教育』第64号、2015年、30-32頁。
- 『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』東京：大修館書店、2017年。
- 田中真理「ライティング研究とフィードバック」大関浩美編著・名部井敏代・森博英・田中真理・原田三千代著『フィードバック研究への招待：第二言語習得とフィードバック』くろしお出版、2015年、107-138頁。

(なががわ・ひろよ 短期大学部准教授)

